

接地型住宅地におけるコミュニティ生活 その1 近隣コミュニケーションの現状と意識

久保妙子（聖母女学院短大）

〔目的〕戸建住宅地や、戸建に近いかたちのタウンハウスタイプなどの接地型の住宅地においては、住戸が上下左右に密接している集合住宅に比べて、近隣との関わりが希薄ではないかと考えられる。本研究は、高齢化しやすい状況にあるそれらの住宅地をとりあげ、今後さらに重要になるであろうコミュニティのあり方を検討することが目的である。

〔方法〕戸建住宅地および分譲テラスハウス、連続建形式の市営住宅の3カ所を対象として、留置自記入式アンケート調査をおこなった。調査項目は、住戸外に出る行為から始まる近隣コミュニケーションに関するもので、調査時期は1999, 1998, 1996年の各8～9月、合計サンプル数は489である。

〔結果〕戸建住宅地および分譲テラスハウスともに、向こう三軒両隣とは、男性では約半数が「会えば挨拶する程度」、女性では半数近くが「なかには立ち話する人もいる」状態である。意識としては「向こう三軒両隣にこだわらず気の合った人とつきあいたい」が7～8割で、とくに女性でそう考える割合が高く、かつては必然的にコミュニティの単位であった向こう三軒両隣との関係も変わってきている。具体的には、「お土産のやりとり」「宅配物の預けあい」「おすそ分け」「留守の声かけ」が上位で、向こう三軒両隣の近い範囲でおこなわれることが多い。一方、「趣味やレジャーを一緒に楽しむ」「家に行き来する」ような親しいつきあいは離れた家との間にあることが多く、選択性のあるものになっている。また市営住宅は高齢者コミュニティが形成されている特殊例ではあるが、男性の親しいつきあい、病気のとき助けあうなどの他では少ないつきあい方がみられる。